

【原著】

学生の学内活動の活性化に向けた取り組み

——福祉的支援における視点の活用——

中 村 卓 治

Efforts to Promote On-Campus Student Activities:
The Use of a Welfare Support Perspective

Takuji Nakamura

1 は じ め に

筆者が本年度より長を務める学生生活支援委員会では、学生の「学内活動の活性化」及び「学生生活の安全の確保」を目指した取り組みが求められている。さらに今年度は、当委員長としての立場から大学 BMS「退学率を引き下げするための総合的な対策の検討」のプロジェクトメンバーにも加わり、退学者の減少対策についても検討を重ねてきたところである。

話は変わるが、筆者の専門は社会福祉学である。社会福祉学は人々の生活のあり方を考える学問であるため、その学問領域を修めた専門職は、利用者の生活を支える術を修得した者であるといえる。ここでいう生活を支える術は、正式には「ソーシャルワーク（社会福祉援助技術）」と呼ばれ、そのソーシャルワークを駆使しながら人々の生活を支える職種を「ソーシャルワーカー」と呼ぶ。本学科はその資格養成^{注①}にあっている。筆者の前職は医療機関におけるソーシャルワーカーであり、後進の育成のために本学に赴任したわけであるが、赴任当初は患者たちに提供してきたソーシャルワークを今後活用することはないものと割り切っていた。しかし、学生たちと共有する時間が増えるにつれ、単に大学生生活を謳歌している者ばかりではないことに気づかされた。確かに医療福祉現場で出会う利用者のように問題を自覚している者ばかりではないが、経済的貧困や人格的な障害をはじめとして、何らかの生きづらさを抱え、時にそれが学業に影響を及ぼしてしまう状況も数多く目の当たりにした。そうした経験を通して「学業不振」や「進路変更」として片付けられてしまう学生の問題の根本に、学内における暮らしや人間関係上の問題が絡んでいることを実感し、支援に限界はあれど前職で培った福祉的視点や技術を活用しながら個人レベルで学生生活支援を行ってきたつもりである。

幸いなことに、今回冒頭に述べたような立場での活動を任じられ、組織として学生生活の支援にあたるのが可能となった。この間筆者が個人レベルで取り組んできた学生生活支援の視点を、委員会メンバーと共有しながら活動が行えることは頼もしい限りである。そこで今回は、学生生活支援委員会及び大学 BMS への取り組みの際に筆者が意識的に活用してきた「福祉的支援における視点」の有効性について、現時点で確認できるものを紹介する。

2 利用者支援における社会福祉援助技術の視点

1) 社会福祉の存在根拠と機能

わが国における社会福祉は、憲法第13条及び第25条がその存在根拠となる。憲法第13条は「幸福追求権」についてふれており、「全て国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大限の尊重を必要とする。」とし、個人の尊重の基、国民個々の幸福追求に向けた取り組みを保障するとしたものである。一方、憲法第25条は「生存権」についてふれ、「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない。」とし、国民の生活の保障を謳っている。第13条は国民の自己実現に向けた取り組みを支えるもの、第25条は国民生活のセーフティネット的な役割を社会福祉が担うことの根拠となっている。

そうした社会福祉の役割を実現させるために、「社会福祉制度」「社会福祉専門機関」「社会福祉専門職」が用意され、日々の国民生活を支えているのである。ここでいう社会福祉専門職として国家資格化されたものには「社会福祉士」「精神保健福祉士」「介護福祉士」「保育士」の四資格があるが、ここでは「社会福祉士」及び「精神保健福祉士」といったソーシャルワークを活用するいわゆるソーシャルワーカーを例にとって社会福祉専門職の役割を考えてみることにする。

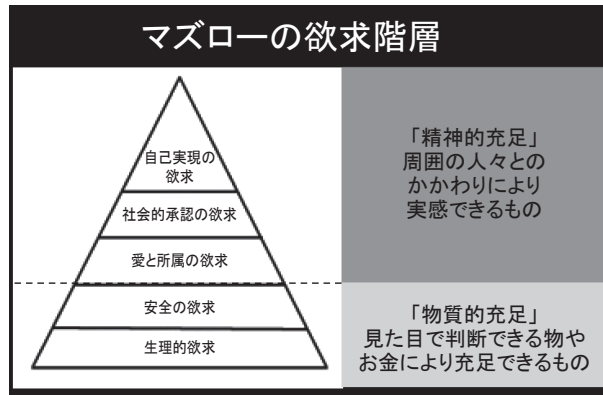
2) 利用者が主体的に問題解決に臨む事を支える

ソーシャルワーカーは利用者が抱えた生活課題の具体的解決をはかる役割にある。しかし単に利用者に代わり問題解決を行うのではなく、お互いが役割を担いながら利用者本人とともに問題解決にあたるというスタンスを大切にす。それは、問題を抱えたことにより利用者が低下させてしまった自尊心や存在価値や自信といったものを、問題解決に臨む協同作業を通して回復させ、可能な範囲で自立した生活を取り戻すことにこそ、ソーシャルワーカーが利用者へ直接かかわる真の目的が存在するためである。そこにソーシャルワーカーの専門性が求められるのである。正直、単なるお助けマンとして、利用者の見えないところで問題解決を肩代わりするほうが作業としては効率的ではある。しかし、その問題解決のプロセスに立ち会っていない利用者は、また同じ生活状況に陥った際に再びソーシャルワーカーに助けを求めなければならないといった屈辱的な体験を繰り返すことになる。利用者自身が解決プロセスを目の当たりにし、どうすればその問題を解決方法を学習し、たとえソーシャルワーカーの手助けはあったとしても自分の力で主体的にその問題に立ち向かったという自覚を通して、利用者は自己肯定感や自己受容を高めるきっかけを得る。そのためソーシャルワーカーは、利用者が自らの権利と責任を自覚しつつ、できるだけ主体的に生活課題に取り組めるための条件整備に注力しているのである。

3) 利用者を取り巻く人間関係を調整・活用する

(1) マズローの欲求階層説

マズロー^{注②}の欲求階層説によると、人間の欲求は、大きく5段階に大別され、低次の欲求が満たされることにより、1段階上の欲求の充足を志す流れがあるとされる。一番低次なものは「生理的欲求」であり、食べることや寝ることといった、人が生きていくために必要最低限の条件を獲得することである。二段階目は「安全の欲求」であり、不安や恐怖から解放され、安ら



ぎのある生活環境を獲得しようとする欲求である。三段階目は「愛と所属の欲求」であり、自分を受け入れてくれる集団や組織につながり、そこに帰属意識を求めようとする欲求である。四段階目は「承認の欲求」であり、周囲の人から自身の存在を認められることにより社会的地位を確保したいとする欲求である。最高次は「自己実現の欲求」と呼ばれ、自分がこの世に誕生した固有の存在意義を問いなおしながら、無欲に精神的な自己成長を図ろうとする欲求である。

(2) 「精神的充足」の必要性

筆者はこのマズローの欲求階層を参考に、人間の欲求は充足の目的により二つに大別することができると考えている。まず一つは「物質的充足」であり、「生理的欲求」及び「安全の欲求」のようなお金や日用品、住居など、形のある「モノ」や「お金」により欲求を充足するものである。もう一つは「精神的充足」であり、「所属と愛の欲求」以上の階層が該当する。これは周囲の人々とのかわりがあるのはじめて達成できるもので、物質的なものでは満たされにくい心理的かつ主観的な欲求の充足である。我々は意識するしないにかかわらず、社会生活上でこの欲求を満たすために日々の生産活動を行っているのである。また、この充足の仕組みは、例に漏れず生活支援を必要とする福祉利用者にも該当する。例えば何らかの事情で経済的困窮に陥った者をソーシャルワーカーとして支援する場合、生活保護などの福祉制度を活用しながら、まず生きていくために必要な生活費や食料、暮らしの場の確保に努める。これは「物質的充足」に該当する。しかし、生活保護が支給できたからといって、その利用者が自らの人生に満足感を得たり自尊心を満たすとは限らない。そもそも物質的満足感には限りがあり、気持ちの持続が難しいのである。我々の身近なところで例えるなら、欲しかったスマートフォンが手に入った瞬間の喜びが永続するわけではなかったり、それが最高次の生きる喜びにはつながりにくいと同じである。そのため、「物質的充足」は人の生活に大切なことではあるが、幸せを実感したり生きがいを感じるためには「精神的充足」もあわせて考慮する必要があるといえる。したがってソーシャルワーカーは、福祉の支援において利用者の物質的充足を確保することをめざすだけでなく、利用者が精神的充足に向かえるよう、本人の人間関係を活用した支援もあわせて行う必要があるのである。

(3) 「人が前向きに生きるための三つの条件」を整える

精神的充足に該当する各々の欲求階層には、立場を問わず人が前向きに生きるための条件が含まれている。したがって利用者に対する福祉の支援においても、物質的充足と共に精神的充

足に努める中で、その条件を意識的に活用することになる。以下、その代表的な「前向きな生活を送るための基本的三条件」（以下、「三つの条件」とする）を紹介する。

① 周囲と肯定的な関係でつながること

前述の通り、生活を充実させていく中で、人は高次の欲求の充足を求めるようになる。その際に必要な条件が「周囲との人間関係」である。周囲からの自らに対する評価、それに対する精神的満足感が重要な鍵を握る。その人間関係における重要な要素が、「肯定的な関係の成立」である。人は周囲との良好な人間関係を通して安心感を得、ストレスを解消させ、情緒を安定させることができる。しかし福祉的支援を求める利用者の多くは、以前にはあった社会との関係が断絶、あるいはスティグマの対象とされ周囲からの否定的な対応にストレスを感じている状況にある。そのため福祉的支援においては、まず既存の人間関係の改善や利用者本人が安心して身を置ける新たな集団や組織につなげることが必要となる。可能であればそうした人間関係の中に、同じような体験をしたピア（仲間）同士のつながりを存在させることが有効である。そうした仲間たちと、苦しみや喜びを分かち合える機会が、利用者の自己受容を促し、生活問題への取り組み意欲を高めるきっかけとなるのである。

② 自分自身の存在役割を実感できること

生活課題を抱えることにより、社会的地位や大切な社会関係を失い、自尊心や自信を低下させた利用者の支援には、新たな形で社会的な役割を確保することが必要である。それはできるだけ周囲から求められる形や承認される形のものの方が役割の実感としては大きくなる。自分の存在を周囲が求めている、役割を認めてくれている、役に立っているという実感は利用者の自己肯定感を育むのである。例えば、現在障害福祉領域においては障害者の就労支援に力を入れているところであるが、この目的は経済的な安定を図るという意味合いとともに、就労という形が社会的役割の実感に有効であり、障害者が自己肯定感を育み、新たな形で自己実現を図るうえで有効な手段であるためにほかならない。就労という明確な役割以外でなくとも、周囲との関係の中で何らかの役割を持ち、他者を支える場面を持つこと、そしてその役割を本人が実感する仕組みが用意されることが望ましい。

③ 少し先の将来がイメージできる生活を送ること

日々、前向きに意欲を持ち、生産的な生活を送るためには、将来の生活像が思い描ける状況が必要となる。将来への希望や人生目標が明確になって初めて、それを達成させるために今必要な努力や取り組みを始めることができるのである。将来の何につながるための作業かが明確でない中では人はその取り組みの動機を持続させることは容易ではない。にもかかわらず、生活課題を抱え人生が行き詰ってしまった福祉利用者は、将来はもちろんのこと明日明後日の生活の見通しも立たない状況にある者が少なくない。そのような不安定な生活状況で、利用者が前向きに意欲を持ち、生産的な生活を送ることは困難を伴う。前述の通り、人は将来のビジョンなきままに現在を精一杯生き抜くことはできない。そのため、今の努力が将来の何につながるのかを利用者にイメージさせるあるいは将来の目標を共に組み立てていく役割も、ソーシャルワーカーの大切な役割となるのである。

この「三つの条件」のように、我々の生活は横軸としての周囲の人々との関係性の充実と、縦軸としての将来目標の明確化を果たすことで精神的充足を促進させ、最高次の自己実現欲求に向かうことができるようになるのである。

3 学生生活支援における「三つの条件」の活用

1) 「三つの条件」から捉える休退学の状況

前述の、①周囲と肯定的な関係でつながること、②自分自身の存在役割を実感できること、③少し先の将来がイメージできる生活を送ること、といった「三つの条件」は、福祉的支援を必要とする利用者の生活だけに不足しているものではない。例えばソーシャルワーカーの支援を必要としない学生たちの生活にとっても同様のことがいえるのである。「学生の意識及び生活の実態に関する調査（平成25年度実施版）」によると、「大学を辞めようと考えた一番の理由」は「進路変更（28.6%）」である。以下、「学習意欲の低下（26%）」、「精神・心理的問題（12.7%）」と続く。10項目あるうちの上位3つだけで三分の二（67.3%）を占める状況にある。よって将来が見えにくく、現状の努力が何につながるのかが実感できず、自分自身の存在に自信がもてず気にはやむ状況は、福祉利用者同様であるといえ、その課題への取り組みには「三つの条件」の整備も必要となる。また、同資料による「学内における人間関係の有無と休退学との関係性」を見てみると、学内におけるクラブサークル活動に参加している者の方が、参加していない者に比べ休退学両方の面で割合が低い結果となっている。人とのつながりが「精神的充足」の面で大切であることを考慮した場合、大学が単に勉学に励むための場と割り切る者よりも、学内での関係を広げ、その関係の中に何らかの役割を持ち、大学キャンパスを様々な用途に活用する者の方が休退学の問題から縁遠いことが見て取れるのである。

2) 「三つの条件」を意識した本学学友会活動に対する支援

学生生活支援委員会（以下、当委員会）が担う役割や取り組み課題は多岐にわたるが、今年度はその中心的取り組みを「学友会活動の活性化」に対する支援とした。

学業以外の学内生活で大きなウエイトを占めるのはクラブサークル活動であり、その活動が充実したものになるためには、まずそのサポート的立場にある学友会がしっかりと役割を發揮できる状況にあることが重要な鍵を握るといえる。そこで当委員会としては学友会と連携し、クラブサークル活動や学内イベントの活性化を図る作業に早々に取り掛かるつもりであった。しかし残念ながら学生の自治組織であるが故の多くの課題を学友会が抱えた状態にあることが判明し、とりあえずはその問題解決や体制の建て直しを支援することが当委員会の喫緊の作業となったのである。その諸々の課題に関する明言は控えるが、当委員会として当初考えた活性化支援のレベルよりも数段下った状況からのスタートを切ることとなったのは事実であり、学友会組織に身を投じ、何らかの役に立ちたいと思う学生たちの意気込みがうまく生かしきれていない状況に大きなもどかしさを感じた。その状況の改善のために、まず筆者は委員長として先の「三つの条件」の活用を念頭に学友会へのかかわり方について当委員会メンバーに説明を行い、その意を受けた委員会メンバーが、担当の学友会組織に対して根気良いかかわりを続けてくれることとなった。その結果として、学友会のメンバーは、各々の役割に対する自覚を高め、学内イベントの目的やプログラムの意図を明確にした運営の重要性などについても理解を示し始めたように感じる。そのひとつの兆候が、今まではほとんどなかったイベント後の振り返りの作業や活動報告書の作成などである。こうした作業は、イベントに意識的・計画的に取り組まない限り行う必要性を生じない作業である。自分たちなりに考え、取り組み、実行したものが実際にどうであったのかを検証し、記録に残し、次年度につなげる作業は、ある面から見ると当たり前の作業ではあるが、その意識が生まれただけでも前進であり活動の評価に値するものであると筆者は考える。

3) 「三つの条件」を活用した支援の実施例

ここでひとつ筆者が運営の支援を直接行った、学友会本部主幹「リーダー養成セミナー」を例にとり、「三つの条件」を意識した支援の意義について考えてみる。リーダー養成セミナーは毎年12月に半日をかけて実施される学友会イベントである。各サークルから部長と会計が参加し、活動に必要な手続きの説明を受けた後、グループごとに話し合いを行う。その話し合いの内容はリーダーとしての心がまえや情報交換といった漠然としたものが多く、話し合いの目的があいまいであったり、会計や部長といった立場の異なる者が混在した話し合いであるがゆえに、話しが進まなかったり、当イベントの内容に不満を持つ者もあったという。傍から捉えれば意義のある集まりに感じるものであるにもかかわらず、主宰する側自身が恒例行事として慣習的に実施し続けた結果、イベントの趣旨やプログラムの目的を見失い、結果として運営する側も参加する側も意義を感じることをできない、単なるノルマとしてのイベントになってしまっていたようである。

そうした問題の解決には、まず運営側の意識とモチベーションを高める支援が必要であると考え、数回にわたり学友会現会長と新会長との時間を共有しながら「リーダー養成セミナー」を参加者・主催者双方が意義あるイベントにするための検討を深めた。

結果、イベントは二部構成とし、第一部の手続きに関する説明は全員参加にし、第二部は次年度部長になる学生のみが参加するといった形をとった。さらにただ当日参加してもらうのではなく、新部長には事前にいくつかのテーマについて個別に検討をしてもらい、その提出されたデータを全て冊子にまとめ当日参加者に配布した。事前に検討してもらったテーマとは、「1. (サークルとしての) 年間達成目標」「2. その目標を達成するための実施計画」といったものである。2についてはさらに、「①その目標達成のためにリーダーとして取り組む内容」「②その目標達成のためにメンバー全員が取り組む内容」「③周囲に求める必要な支援の内容」といった三項目について検討をもらった。

部長に対しては、単にサークル活動を楽しむだけでなくその組織を運営する責任と権利があることを自覚してもらい、漠然と会を運営するのではなく、サークルをどのようなものにしたのか、どのような目標に取り組んでいきたいのか、そのためにはどのような自身の努力や周囲からの協力が必要なのかを検討してもらった。この作業がいわば「三つの条件」のうちの「少し先の将来がイメージできる生活を送る」にあたるものである。また、第二部で新部長のみが残るところに単に負担を感じさせるものにせず、各々のサークルを率いる特別な立場の者であるというステータス（存在役割）を感じてもらうことに注力した。この仕組みが「三つの条件」のうちの「自分自身の存在役割を実感できること」である。

また、サークルでは一人しかいない立場の者たちがつながりあい支えあう場がいかに必要であるかを実感してもらうための工夫を施した。グループは4～5人程度の部長とファシリテーター役の学友会本部の学生で構成され、冊子を活用しながら順番にサークルの状況と達成目標について説明を行った後、グループメンバーからのフィードバック（質問やアドバイス）を受ける時間を設けた。そのフィードバックの際には、批判ではなくもっとその取り組みがよくなるためにはどうしたらよいかを共に考える姿勢で提案してもらうこと、自分たちも活用したいと思える部分を言語化して返してもらうことなど、会を心地よい意義あるものにするためのルールを理解の上で開始をもらった。ここに「三つの条件」のうちの「周囲と肯定的な関係でつながること」の効果を含ませたつもりである。

結果、参考資料にあるようにグループでの話し合いは盛況であった。筆者が特に感心したのは学友会本部のファシリテーター役の動きであった。自分たちの役割の意を汲んだ学友会本部

学生の学内活動の活性化に向けた取り組み

の学生たちの働きは効果的であった。主催者・参加者双方が互いに意義を感じるイベントになったことは、参加者の感想のみならず傍らで見守った我々教職員も実感するところである。本イベントを通して、クラブサークルのリーダーと学友会メンバーがこうして肯定的な関係でつながり、学友会メンバーが自らの役割の意義を実感してこそ、支援の充実に対する力もはいり、振り返りや改善の努力への動機も高まるものであることを、本イベントにかかわる中で改めて実感した次第である。

このように、福祉的支援に必要とされる、人が前向きに生きるための「三つの条件」の整備は、学生が大学生活を充実したものであると実感してもらう際の大きなヒントになるのである。

4 さ い ご に

福祉的支援で活用するものを学生生活支援にいかそうとする試みはまだ始まったばかりであり、その効果を客観的に検証するにはもう少し時間が必要なところである。しかし少なくとも自分たちの学内活動を見守り、その取り組みを肯定的に評価してくれる第三者がいることを迷惑に感じる学生はいないはずである。人はそれぞれに何らかの役割を抱え、その役割が他者の役に立っていると感じることで、肯定的につながる人間関係があること、今行っている取り組みが将来の何につながるのかが実感できる生活を送ることは、福祉利用者や学生といったサービスユーザーの側のみならず、支援する側の我々にとっても必要な条件ではなからうか。

今回このような実践に取り組めたこと及びその活動をまとめる機会が生まれたことは、学生支援にご尽力いただいた当委員会構成員の先生方、我々の思うような活動ができるよう融通を利かせ見守っていただいた学生サポートセンター長及び学生サポート課の皆様の協力があったことであり、そのご支援に心より感謝申し上げますところである。

最後になったが、学生たちが「文教へ来てよかった」と思える実感はどこから生まれるものなのか、それに対して当委員会が果たす役割は何であるかについて自問しつつ学生生活支援を継続していく意を誓いながら、このあたりで実践報告を終了とする。

注 釈

注① わが国では「社会福祉士」及び「精神保健福祉士」がソーシャルワーカーの国家資格として位置づけられており、本学ではその両資格の養成にあたっている。

注② 1908年～1970年 A. H. Maslow アメリカの心理学者

参 考 文 献

- ① 日本私立大学協会 学生生活指導研究委員会 編纂「学生の意識及び生活の実態に関する調査（平成25年度実施）」日本私立大学協会 2014年12月
- ② 日本学生支援機構「平成24年度学生生活調査」日本学生支援機構 2014年2月
- ③ 大島侑・金田鈴江 編「精神保健 これからのライフサイクルと心の健康」川島書店 1997年4月
- ④ 田口則良 編著「自分理解の心理学」北大路書店 2001年3月

参 考 資 料

「第18回リーダー養成セミナー報告」 ※必要な項目のみ抜粋

- 実施日 平成26年12月13日（土）
- 実施場所 ラーニングコモンズ
- 参加団体 27団体（登録35団体中）
- 参加者 51人
- アンケート結果

1. リーダー養成セミナー全体の感想

- ・サークル運営の仕方がよく理解できたため来年はしっかりとサークル運営をしていきたい。
- ・今までと同じような内容かと思っていたが、今年から新たな取り組みがあったためとてもすばらしいと思った。
- ・自分のサークルだけの悩みだと思っていたことも、他のサークルに共感してもらい安心した。
- ・他のサークルの話聞くことができたため、今後のサークル活動の参考にしたいと思った。
- ・今後のサークル活動についてよくわかった。
- ・同じリーダーの立場の人で話し合いができてよかった。
- ・リーダーだけでなく、次長や次長以外にも参加してもらおうと思った。
- ・新しい達成目標ができた。
- ・自分のサークルにはない考えを学ぶことができてよかった。
- ・細かくわかりやすい説明であった。

2. 第二部のリーダーのみのグループワークについての感想

- ・リーダーとしての自覚ができた
- ・もっと時間が欲しいと感じた。
- ・他のサークルがされている取り組みを知ることができた。
- ・サークル全体という広い視野で様々なことを知ることができた。
- ・（グループをかえて）2回もディスカッションはいらなかった。
- ・（自分の）未熟さがわかった。出すべき紙（事前提出のアンケート）を出そうと思った。
- ・リーダーとしての自覚を持ってボランティア活動に参加したい。
- ・（学友会の）本部員がサポートしたため話しやすかった。
- ・リーダーの仕事の大変さや内容を共有できた。
- ・距離感が近く、人数が限られていたので話しやすかった。
- ・様々なアイデアをもらうことができ、これからも活動を続けていこうと思った。
- ・表面的なことではなく、（各サークルの）実態や同じ立場の人の話が聞けてよかった。
- ・とても有意義な時間になった。
- ・参考にしたいと思ったことをサークルに取り入れたい。
- ・（自分の説明の）補足をして欲しいので、1サークル二人一組にしてほしい。

—平成27年1月31日 受理—